

現代青年における道具的機能評価からの準拠 集団選択に関する研究

下斗米 淳

下斗米 (2002a, 2002b) は、1980年代以降に日本で行われた自己開示研究を概観し、小学生から大学生に至る広い年齢範囲において、概ね父親には進学、就職、経済、社会事象について、母親には生活態度や身体、性、家庭内の出来事に関して、教師に対しては学習法や成績などについての自己開示がなされやすいと共通に報告されていると指摘している。その上で、こうした結果に対する1つの解釈として、父親はいわば‘社会人の先輩’や‘経済の専門家’として、母親は‘性の先輩’、‘家庭の中心人物’として、教師は‘学業の専門家’として自らよりも長じていると認知されているために、それに関連深い事柄に特化させて自己開示がなされているのではないかと論じている。確かに、対人関係は、生後全面的な養護—被養護者としての親子関係から開始されることであろう。しかしながら、この解釈に従うならば、そのような親子関係にあっても以後も同様であり続けるのではなく、加齢と共に、異質性を背景に特定な資源の提供を求め、道具的機能が期待できるように個別の対人関係を構築し直していこうとする過程が想定できるのではなかろうか。この捉え方に従うならば、この道具的機能に着目することにより、身の回りにいる他者との間で、当面の課題解決のために互いに他者の優れた資源に依存しようとする過程から、どのように相互依存的関係が再構築されていくかを明らかにすることができるようになる。

但し、自己と異質である他者は身の回りに数多く存在するであろうから、その他者のいずれに対しても、資源が長じている限り、道具的機能を期待することはできよう。しかし、その期待できそうな数多くの他者の中でも、実際に期待する他者とは、当面自己にとって意味のある特徴次元において、同じく特徴的とみなせる集団成員となるのではなかろうか。例えば、自己における特徴次元として学業があげられるとするならば、その学業に最も関わりの深い他者や集団として教師や学校組織が選ばれるであろうし、一方学業と直接の関わりをもたない近隣住

民や商店員などは準拠集団としての意味をもつとは考えにくい。下斗米（1997）は、自己を特徴づける特性次元がまた他者認知においても同様に重視される傾向を示している。特定な資源の優劣という点で異質性を認め道具的期待を形成するにしても、高次には、自己と他者集団が当該の資源についていずれも同様に特徴的と認知されていることが前提となって、ネットワークが作り出されていると考えられる。

Tajfel と Turner により提唱された自己カテゴリー化理論 (self-categorization theory, Turner, 1987) では、まず身の回りの他者と自己との類似性を査定し、類似した他者を見出した時、自己も含めて他者と1つの「カテゴリー」をなすと私たちは考えるようになるとする。この時、その「カテゴリー」、すなわち集団の一員としての社会的アイデンティティが確立されたことになる。しかしながら、同じ「カテゴリー」を形成する他者と自己との間で異質な面を見出すと、それを元にして個人的アイデンティティが獲得されるとしている。この考え方は、ここでの議論と整合している。すなわち、自己と他者集団との間で特徴次元が類似しているという高次の認知があった後、そこに自己を帰属させた場合に特徴次元における優劣という異質性から道具的期待が形成されていくものと考えられるからである。

本研究では、単に当面の課題解決に関わる資源量を自己よりも多く有する他者と対人関係を結ぼうとするか否かのみを検討するのではなく、そもそも自己を帰属させる準拠集団の選択される過程が、自己と他者が類似した特徴を有するという高次の認知をし社会的アイデンティティを確立した後、あるいはまた確立と同時に、そこで特徴とされる次元上での優劣という異質性も考慮された結果生じている可能性を議論しようとするものである。

なお異質性という用語は、役割行動の分担の前提とされている点にのみ限定すれば、相補性と同義に扱えよう。しかし異質性認知と言う時、そこで優位とされる者は、劣位者に対して道具的機能を有するだけでなく同時に指導的立場を担う（中村、1952）ことが想定されよう。単に資源を補完し合うという意味で用いられる相補性に対して、相対的な指導—従属の役割分化（Parsons & Bales, 1955）にまで言及できるという点で、異質性という用語の方が広義にとらえられる。そこで本論文では、以後異質性と表現する。

ところで、とりわけ近年になり、現代青年の対人関係が希薄化している（e.g., 岡田、2002; 千石、1991）、あるいはまた対人ネットワークが狭いと指摘（e.g., 門脇、1995; 上野・上瀬・福富・松井、1994）されてきている。しかしこれまで本論では、対人関係の成立基盤に異質性次元が仮定でき、その異質性認知に基づ

き道具的機能を期待するところから新たな対人関係を構築していく過程が想定された。もしこの議論を踏まえるならば、対人関係の希薄化とは、道具的機能を互いに期待し発現し合うところから生じる相互依存性レベルが低い段階にとどまっていることを意味しよう。また、対人ネットワークの狭さは、自身を取り巻くさまざまな他者との間で異質性認知に基づく道具的機能に応じて、対人関係を使い分けることが少ない結果であると解せるのではなかろうか。

Sherif & Sherif (1964) は、自己の衝動や理想像、目標の実現に向けて他者と自身を関係づけることに最も駆り立てられるのは青年であり、この関係づけたいと望まれる集団を準拠集団と呼んでいる。準拠集団は、自己と集団成員との比較を通して自己評価に影響を与え、また集団規範によって個人の行動を制御する働きがあるとされている (Kelley, 1952)。従って、自己の衝動の充足や、理想像あるいは目標の実現のために、今後の指針を得たり参照する上に適切な、自己よりも当該の資源を多く有する他者や集団を選択しようとすることは、とりわけ青年にとって想定できる (Sherif & Sherif, 1964)。先述の通りに、現代青年の対人関係のあり方を巡る研究においては、現代青年が自己に指針や参照を与えてくれるという点での道具的機能を認めてこれまでにある対人関係を構築し直すということをあまりせずに、また自己の得たいと考える指針や参照内容に応じて多様に対人ネットワークを広げようとする志向が現代青年に弱いことを指摘するものであると考えられよう。

そこで本研究では、調査対象者を大学生とし、また、下斗米 (2002a, 2002b) に従い、自己より長じている資源の提供に対する期待に注目し、自己の指針や参照を得ようとする際にそれを誰に求めようとするかをもって、道具的機能の期待と定義づけた。その上で、現代青年について、自己を帰属させる準拠集団を多様な対人関係や集団から、類似性認知を前提としながらもいかに道具的機能への期待から選択し、また、どれ程に対人ネットワークの拡張性が認められるかを検討していくことが、本研究の目的とした。

方法

調査対象者

本研究は質問紙調査によった。東京都、神奈川県、千葉県、福島県の国立大学及び私立大学生男女 551 名を調査対象者とした。質問紙の回答を承諾しなかった者や回答不備の者等を除き、最終的に分析対象となった者は 506 名 (男性 231 名、女性 275 名) であった。

質問紙の構成

(1) フェースシート 回答の承諾が得られた者について、まず性別、学年、年齢等を記入させた。また家族の構成人数と一人暮らしをしているか否かに回答を求めた。

(2) 準拠志向度評価 自己概念の諸側面に関する研究 (Burns, 1979; 山本・松井・山成、1982) や自己開示研究 (e.g., 榎本、1987; Jourard & Lasakow, 1958) を参考に、自己の指針を得ようとする可能性のある事柄 (以下、自己の諸側面と略記) として、'バックグラウンド' '家庭生活' '友人関係' '恋人関係' '食事' '住まい' 'ファッション・財産 (服飾と略記)' '性格・能力 (性格と略記)' '余暇活動' '学業' '健康・身体 (健康と略記)' '金銭・経済 (金銭と略記)' '将来・人生観 (将来と略記)' の13領域を設定した。

また準拠集団候補として、Turner (1987) や岡林 (1997) などにより自己概念や自己評価に影響を及ぼすとされた集団を整理の上、'家族' '親戚' '居住地近隣者 (近隣者と略記)' '学部・学科クラスの人物 (クラスと略記)' 'サークル・クラブの人物 (クラブと略記)' '学校の教職員 (教職員と略記)' '恋人・片思いの人 (恋人と略記)' 'アルバイト・職場の人物 (職場と略記)' '書物 (小説、エッセイ、週・月刊誌など) に取りあげられた架空ないし実在の人物像 (書物と略記)' '映画・テレビ・インターネットに取りあげられた架空ないし実在の人物像 (メディアと略記)' '国や地方自治体の法規 (法律、条例、道徳・倫理、慣習、常識) に表現される人物像 (法規慣習と略記)' '自分の過去経験や自分の信念・憧れから作られた人物像 (過去経験と略記)' という12の対人関係・集団を設定した。

そして13領域毎に、12の対人関係・集団への準拠志向度程度を、“全くそう思わない” (-3) から“極めてそう思う” (+3) までの両極7件法尺度で、準拠志向度の評定を求めた。

(3) 現在の準拠集団 現在の準拠集団を12の対人関係・集団から複数認めて選択させた。

質問紙の実施方法

質問紙を大学の授業中に、講義室において集団施行した。

結果

分析対象者の特性

分析対象者 506 名の学年の内訳は、1 年次生が 118 名、2 年次生 194 名、3 年次生 157 名、4 年次生 37 名となっていた。平均年齢は 20.01 歳、年齢範囲は 18 歳から 28 歳であった。なお男女間で、学年・年齢の内訳に大きな差異はなかった。対象者の家族構成については、男女共に、4 人家族（男性 43.50%、女性 46.30%）が最多で、次いで 5 人家族（男性 28.20%、女性 29.60%）が続き、これらで全体の 7 割強が占められていた。家族との同居状況では、同居（男性 55.80%、女性 58.50%）が一人暮らしの者よりもやや多めとなっていた。

準拠集団の分類

まず、12 の対人関係・集団の間には、自己の諸側面に応じて、どのように準拠集団としての機能に類似したあるいは差異があると評価されているかを検討するために、自己の諸側面毎に、準拠集団評価の評定値に基づき、主成分法並びに Promax 回転による因子分析を施した。なお、準拠集団評価に性差が見出されるか否かも確認するために、男女別に、それぞれ自己の諸側面毎に因子分析を行った。結果は次頁表 1 と表 2 の通りとなり、因子構造に性差が認められた。そこで、以後の分析を、男女別に行うこととした。

対人ネットワークの拡張可能性

準拠志向度得点 まず先述の因子分析の結果からは、自己の 13 側面のそれぞれにおいて、12 の集団が類似した道具的機能をもつ少数の集団群に要約できることが示されたため、因子毎に、同一因子を構成する集団の準拠志向度評定値を合算し平均値を算出した。そしてこの平均評定値が各準拠集団への志向の強さを表すものと考え、準拠志向度得点と定義した。その結果、男女共に、概ねいずれの自己の側面についても、公式集団や権威集団に対する準拠志向度得点が低くなっており、相対的に友達集団や一次的集団への準拠志向度得点が高めであった。またこうした傾向は、例えば‘バックグラウンド’や‘友人関係’、‘食事’や‘性格’、‘学業’、‘将来’などのより多くの側面において、女性の方が男性に比べて顕著である様子が窺われる結果であった。

対人ネットワーク拡張への志向類型 対人ネットワークの拡張可能性を検討するため、多様な集団への準拠志向度の強さから、対象者の類型化を試みた。

類型化は、男女別に、全ての自己の諸側面における準拠志向度得点から平方ユ

表1 男性対象者における準拠集団評価の因子分析結果

因子名	項目	因子間相関		
		1	2	3
バックグラウンド				
第1因子「一次的集団」	クラス(.845), クラブ(.784), 恋人(.776), 職場(.522), 家族(.450)	—	.344	.486
第2因子「知識集団」	書物(.918), メディア(.830), 過去経験(.621)	—	—	.349
第3因子「公式的集団」	親戚(.900), 近隣者(.826), 法規慣習(.633), 教職員(.514)	—	—	60.210%
家庭生活				
第1因子「友達集団」	クラブ(.889), クラス(.840), 職場(.800), 恋人(.681), 教職員(.492)	—	.423	.414
第2因子「世間集団」	書物(.908), メディア(.784), 過去経験(.757), 法規慣習(.529)	—	—	.346
第3因子「身内集団」	親戚(.905), 近隣者(.709), 家族(.652)	—	—	59.706%
友人関係				
第1因子「権威集団」	親戚(.916), 教職員(.774), 法規慣習(.716), 近隣者(.693), 家族(.588)	—	.347	.413
第2因子「友達集団」	クラス(.841), クラブ(.781), 恋人(.694), 職場(.542)	—	—	.232
第3因子「知識集団」	書物(.930), メディア(.828), 過去経験(.588)	—	—	58.754%
恋人関係				
第1因子「権威集団」	親戚(.911), 近隣者(.787), 教職員(.776), 家族(.754), 法規慣習(.693)	—	.266	.289
第2因子「友達集団」	クラス(.880), クラブ(.802), 職場(.607), 恋人(.585)	—	—	.295
第3因子「知識集団」	書物(.862), 過去経験(.810), メディア(.768)	—	—	62.748%
食事				
第1因子「一次的集団」	恋人(.869), クラブ(.777), クラス(.739), 家族(.609), 職場(.457)	—	.391	.455
第2因子「知識集団」	書物(.894), メディア(.834), 過去経験(.822)	—	—	.425
第3因子「公式的集団」	近隣者(.817), 親戚(.814), 教職員(.786), 法規慣習(.551)	—	—	62.519%
住まい				
第1因子「友達集団」	クラス(.890), クラブ(.884), 職場(.721), 恋人(.653)	—	.361	.409
第2因子「権威集団」	親戚(.861), 近隣者(.779), 教職員(.666), 法規慣習(.619), 家族(.457)	—	—	.341
第3因子「知識集団」	書物(.887), メディア(.759), 過去経験(.706)	—	—	59.463%
ファッション・財産(服飾)				
第1因子「権威集団」	親戚(.885), 教職員(.756), 近隣者(.750), 法規慣習(.617), 家族(.592)	—	.325	.263
第2因子「友達集団」	クラス(.863), 恋人(.819), クラブ(.806), 職場(.660)	—	—	.391
第3因子「知識集団」	過去経験(.783), メディア(.775), 書物(.737)	—	—	60.889%
性格・能力				
第1因子「友達集団」	クラス(.857), クラブ(.855), 恋人(.750), 職場(.587)	—	.386	.299
第2因子「世間集団」	書物(.898), メディア(.836), 法規慣習(.615), 過去経験(.584)	—	—	.310
第3因子「養育者集団」	親戚(.892), 近隣者(.770), 家族(.587), 教職員(.367)	—	—	56.452%
余暇活動				
第1因子「権威集団」	親戚(.889), 近隣者(.736), 法規慣習(.667), 教職員(.577), 家族(.467)	—	.330	.214
第2因子「友達集団」	クラブ(.770), クラス(.767), 恋人(.763), 職場(.675)	—	—	.231
第3因子「知識集団」	メディア(.807), 書物(.796), 過去経験(.493)	—	—	58.719%
学業				
第1因子「世間集団」	書物(.914), メディア(.854), 過去経験(.746), 法規慣習(.585)	—	.453	.452
第2因子「友達集団」	クラス(.947), 恋人(.731), クラブ(.692), 職場(.494), 教職員(.391)	—	—	.441
第3因子「身内集団」	親戚(.866), 家族(.819), 近隣者(.595)	—	—	58.861%
健康・身体				
第1因子「友達集団」	クラス(.919), 恋人(.853), クラブ(.817), 職場(.592)	—	.412	.476
第2因子「権威集団」	親戚(.868), 近隣者(.821), 教職員(.789), 法規慣習(.631), 家族(.372)	—	—	.349
第3因子「知識集団」	書物(.867), 過去経験(.796), メディア(.759)	—	—	64.003%
金銭・経済				
第1因子「一次的集団」	クラス(.924), クラブ(.841), 恋人(.730), 職場(.606), 家族(.489)	—	.465	.324
第2因子「公式的集団」	教職員(.866), 近隣者(.807), 親戚(.636), 法規慣習(.621)	—	—	.458
第3因子「知識集団」	過去経験(.898), メディア(.749), 書物(.740)	—	—	62.470%
将来・人生観				
第1因子「一次的集団」	クラス(.901), クラブ(.811), 恋人(.750), 家族(.517), 職場(.362)	—	.377	.480
第2因子「知識集団」	書物(.939), メディア(.870), 過去経験(.668)	—	—	.408
第3因子「公式的集団」	近隣者(.878), 親戚(.867), 法規慣習(.467), 教職員(.371)	—	—	61.043%

注) 表中の括弧内は因子負荷量を示す。

表2 女性対象者における準拠集団評価の因子分析結果

因子名	項目	因子間相関			
		1	2	3	4
バックグラウンド					
第1因子「世間集団」	メディア(.933), 書物(.886), 過去経験(.676), 法規慣習(.570)	—	.309	.160	.118
第2因子「友達集団」	クラブ(.812), クラス(.727), 恋人(.721), 職場(.617)	—	—	.160	.150
第3因子「親類縁者集団」	親戚(.831), 近隣者(.806)	—	—	—	.112
第4因子「養育者集団」	家族(.784), 教職員(.592)	—	—	—	—
			累積寄与率	63.985%	
家庭生活					
第1因子「知識集団」	書物(.877), メディア(.848), 過去経験(.763)	—	.373	.095	.112
第2因子「権威集団」	教職員(.863), 職場(.662), 法規慣習(.506)	—	—	.274	.204
第3因子「友達集団」	恋人(.859), クラブ(.704), クラス(.574)	—	—	—	-.005
第4因子「親類縁者集団」	親戚(.803), 家族(.759), 近隣者(.511)	—	—	—	—
			累積寄与率	66.133%	
友人関係					
第1因子「知識集団」	書物(.897), メディア(.851), 過去経験(.820)	—	.326	-.065	.321
第2因子「身内集団」	親戚(.799), 家族(.662), 近隣者(.711), 法規慣習(.383)	—	—	.008	.373
第3因子「友達集団」	クラス(.716), クラブ(.705), 恋人(.859)	—	—	—	-.080
第4因子「課題集団」	職場(.941), 教職員(.481)	—	—	—	—
			累積寄与率	63.278%	
恋人関係					
第1因子「権威集団」	教職員(.863), 近隣者(.820), 親戚(.724), 法規慣習(.658)	—	.268	.127	.119
第2因子「知識集団」	メディア(.848), 書物(.878), 過去経験(.653)	—	—	.100	.021
第3因子「友達集団」	クラス(.831), クラブ(.697), 職場(.595)	—	—	—	.152
第4因子「情緒集団」	恋人(.800), 家族(.697)	—	—	—	—
			累積寄与率	64.347%	
食事					
第1因子「知識集団」	書物(.858), メディア(.823), 過去経験(.780)	—	.417	.244	.006
第2因子「権威集団」	近隣者(.828), 教職員(.752), 親戚(.630), 法規慣習(.450)	—	—	.236	.032
第3因子「友達集団」	クラス(.815), クラブ(.776), 恋人(.631), 職場(.613)	—	—	—	.250
第4因子「家族集団」	家族(.936)	—	—	—	—
			累積寄与率	66.057%	
住まい					
第1因子「権威集団」	教職員(.769), 法規慣習(.715), 近隣者(.641), 職場(.583)	—	.318	.305	.162
第2因子「友達集団」	恋人(.836), クラブ(.743), クラス(.728)	—	—	.282	.084
第3因子「知識集団」	メディア(.872), 書物(.859), 過去経験(.691)	—	—	—	.031
第4因子「血族集団」	家族(.805), 親戚(.608)	—	—	—	—
			累積寄与率	65.710%	
ファッション・財産(服飾)					
第1因子「権威集団」	教職員(.789), 近隣者(.769), 法規慣習(.739), 親戚(.612)	—	.287	.218	.024
第2因子「友達集団」	クラス(.833), クラブ(.768), 職場(.664)	—	—	.302	.182
第3因子「知識集団」	メディア(.827), 書物(.789), 過去経験(.772)	—	—	—	.028
第4因子「情緒集団」	家族(.855), 恋人(.533)	—	—	—	—
			累積寄与率	64.277%	
性格・能力					
第1因子「権威集団」	近隣者(.847), 教職員(.731), 親戚(.684), 法規慣習(.561), 職場(.527)	—	.316	.193	—
第2因子「知識集団」	書物(.874), メディア(.868), 過去経験(.790)	—	—	.131	—
第3因子「一次的集団」	恋人(.792), クラス(.648), 家族(.638), クラブ(.611)	—	—	—	—
			累積寄与率	56.797%	
余暇活動					
第1因子「権威集団」	教職員(.871), 近隣者(.780), 法規慣習(.737), 親戚(.629)	—	.304	.289	.100
第2因子「知識集団」	書物(.915), メディア(.910), 過去経験(.587)	—	—	.153	-.038
第3因子「友達集団」	恋人(.782), クラス(.755), クラブ(.681), 職場(.519)	—	—	—	.062
第4因子「家族集団」	家族(.833)	—	—	—	—
			累積寄与率	65.268%	
学業					
第1因子「知識集団」	書物(.907), メディア(.906), 過去経験(.765)	—	.417	.244	.006
第2因子「学校集団」	クラブ(.787), クラス(.780), 恋人(.697), 教職員(.387)	—	—	.236	.032
第3因子「公式的集団」	近隣者(.875), 親戚(.849), 法規慣習(.542)	—	—	—	.250
第4因子「我が家集団」	家族(.820), 職場(-.565)	—	—	—	—
			累積寄与率	63.066%	
健康・身体					
第1因子「権威集団」	法規慣習(.797), 教職員(.793), 近隣者(.770), 親戚(.729)	—	.173	.247	—
第2因子「知識集団」	書物(.863), メディア(.861), 過去経験(.652)	—	—	.265	—
第3因子「一次的集団」	クラス(.779), クラブ(.720), 恋人(.712), 家族(.479), 職場(.398)	—	—	—	—
			累積寄与率	58.138%	
金銭・経済					
第1因子「権威集団」	近隣者(.846), 親戚(.747), 教職員(.694), 法規慣習(.593)	—	.381	.285	.004
第2因子「知識集団」	書物(.856), メディア(.837), 過去経験(.765)	—	—	.249	-.022
第3因子「友達集団」	クラス(.844), クラブ(.832), 恋人(.599), 職場(.534)	—	—	—	.125
第4因子「家族集団」	家族(.881)	—	—	—	—
			累積寄与率	68.471%	
将来・人生観					
第1因子「世間集団」	書物(.932), メディア(.912), 過去経験(.742), 法規慣習(.441)	—	.308	.293	-.118
第2因子「友達集団」	クラス(.763), クラブ(.739), 教職員(.575), 職場(.526)	—	—	.305	.042
第3因子「親類縁者集団」	親戚(.866), 近隣者(.808)	—	—	—	-.193
第4因子「養育者集団」	家族(.823), 恋人(.658)	—	—	—	—
			累積寄与率	63.327%	

注) 表中の括弧内は因子負荷量を示す。

ークリッド距離を算出し、Ward法によるサンプル・クラスタ分析によった。その結果、男性では大きく4クラスタ（析出距離は37.21）、女性においては5クラスタ（析出距離は31.63）が析出された。次に、これらのクラスタの特徴を推定するために、準拠志向度得点を標準得点に変換し、自己の側面毎に、クラスタ間の差異を検討した。表3と表4には、各クラスタの標準得点の平均値と多重比較の結果を示す。

男性の第1クラスタは、全集団の準拠志向度得点が正の値を示し、いずれも他のクラスタに比べて高かった。第2クラスタは、知識集団と、友達集団ないし一次的集団で相対的に準拠志向度得点が高かった。第3クラスタでは総じて準拠志向度得点は低めであるものの、友達集団にのみ正の値を示していた。第4クラスタについては、正の値を示すものが見あたらず全ての集団への準拠志向度得点が低かった。こうした特徴的差異から、まず第1クラスタは、いずれの他者集団も準拠枠になり得る可能性を認めていると考えられるために、「広範に準拠集団をもとうとするタイプ」と命名した。第2クラスタでは、家族や友人など、日頃ルーチンとして直接顔を合わさざるを得ず相互作用頻度の高い他者と、逆に自身との対面的な相互作用が行い得ない他者への志向が強かった。内・外集団の区別がより明確に意識されていると推測できるので、第2クラスタは「内・外集団を分極化させるタイプ」とした。第3クラスタは、多くの自己の側面に関する準拠先が友達にのみ限定されやすい点の特徴としていたために、「友達にのみ埋没するタイプ」と解釈した。そして第4クラスタについては、異質性を背景にした道具的機能を期待してはおらず、偶発的な契機によって形成させたり崩壊してしまうような対人関係しか持ち得ていない様子が想定される。そこで「全ての対人関係が希薄なタイプ」と呼ぶこととした。

女性の第1クラスタは、権威集団の準拠志向度得点が高く、逆に知識集団への準拠志向度得点が低く、第2クラスタは、他の集団の準拠志向度得点がいずれも負の値を示す中で、知識集団や世間集団が正の値を示し高かった。第3クラスタでは、友達集団の準拠志向度得点が全側面においても高く、家族集団、情緒集団や一次的集団、知識集団も正の値を示す一方、世間集団と権威集団は負の値を示していた。第4クラスタについては、‘学業’に関しての我が家集団や‘服飾’に関しての情緒集団などで正の値が示されるものの、それらを除けば全ての集団に対する準拠志向度得点は負の値を示し低くなっていた。第5クラスタについては、‘学業’における我が家集団を除く全集団の準拠志向度得点が正の値を示し、他のクラスタに比べて高くなっていた。こうした特徴的差異から、まず第1クラスタは、権威に従おうとする傾向にあると考えられたので、「権威受容タイプ」

表3 男性クラスタ別、準拠志向度標準得点の平均値と標準偏差及び分散分析結果

	クラスタ 1	クラスタ 2	クラスタ 3	クラスタ 4	F 値
バックグラウンド					
一次的	.764 (.758) a	.175 (.770) b	.026 (.910) b	-.990 (.954) c	$F(3,227) = 60.150^{**}$
知識	.546 (.746) a	.279 (.886) a	-.904 (.902) c	-.418 (.921) b	$F(2,454) = 2.006$
公式的	1.231 (.951) a	.068 (.736) b	-.514 (.826) c	-.727 (.705) c	$F(6,454) = 11.065^{**}$
家庭生活					
一次的	.824 (.686) a	.019 (.686) b	.561 (1.142) a	-1.053 (.765) c	$F(3,227) = 99.328^{**}$
世間	.875 (.527) a	.282 (.839) b	-1.074 (.660) d	-.557 (.873) c	$F(2,454) = 3.197^*$
身内	1.005 (.832) a	.053 (.811) b	-.208 (.939) b	-.735 (.889) c	$F(6,454) = 14.487^{**}$
友人関係					
権威	1.336 (.622) a	.085 (.755) b	-.704 (.646) c	-.713 (.804) c	$F(3,227) = 12.375^{**}$
友達	.738 (.533) a	.151 (.911) b	.171 (.567) b	-1.018 (.952) c	$F(2,454) = 2.864$
知識	.735 (.417) a	.294 (.860) b	-1.350 (.618) d	-.283 (.847) c	$F(6,454) = 20.011^{**}$
恋人関係					
権威	1.299 (.976) a	.013 (.773) b	-.668 (.417) c	-.548 (.814) c	$F(3,227) = 101.738^{**}$
友達	.788 (.517) a	.141 (.901) b	.157 (.804) b	-.964 (.926) c	$F(2,454) = 3.034^*$
知識	.766 (.551) a	.314 (.790) b	-1.235 (.884) d	-.433 (.802) c	$F(6,454) = 14.101^{**}$
食事					
一次的	.832 (.625) a	.220 (.812) b	-.241 (.994) c	-.925 (.864) d	$F(3,227) = 87.145^{**}$
知識	.643 (.649) a	.403 (.789) a	-1.135 (.598) c	-.611 (.904) b	$F(2,454) = 2.137$
公式的	.977 (.598) a	.202 (.940) b	-.697 (.805) c	-.711 (.602) c	$F(6,454) = 6.641^{**}$
住まい					
友達	.596 (.700) a	.232 (.809) a	.221 (.886) a	-1.129 (.808) b	$F(3,227) = 94.846^{**}$
権威	1.250 (.866) a	.094 (.764) b	-.547 (.778) c	-.777 (.650) c	$F(2,454) = 2.247$
知識	.655 (.396) a	.354 (.733) a	-1.046 (.869) b	-.556 (1.097) b	$F(6,454) = 14.680^{**}$
ファッション・財産					
権威	1.141 (.882) a	.099 (.818) b	-.661 (.753) c	-.628 (.739) c	$F(3,227) = 85.678^{**}$
友達	.659 (.522) a	.256 (.830) b	.024 (.838) b	-1.094 (.905) c	$F(2,454) = .981$
知識	.773 (.597) a	.266 (.792) b	-1.069 (.831) d	-.443 (.988) c	$F(6,454) = 10.979^{**}$
性格・能力					
友達	.647 (.687) a	.213 (.808) b	.234 (.637) b	-1.133 (.941) c	$F(3,227) = 99.602^{**}$
世間	.974 (.669) a	.310 (.687) b	-1.366 (.616) d	-.539 (.805) c	$F(2,454) = 2.630$
養育者	1.077 (.756) a	.092 (.837) b	-.511 (.808) c	-.643 (.891) c	$F(6,454) = 18.533^{**}$
余暇活動					
権威	1.273 (.835) a	.083 (.786) b	-.599 (.779) c	-.734 (.607) c	$F(3,227) = 101.377^{**}$
友達	.547 (.688) a	.223 (.818) a	.267 (.843) a	-1.125 (.846) b	$F(2,454) = 3.009^*$
知識	.761 (.445) a	.358 (.740) b	-1.281 (.803) d	-.495 (.888) c	$F(6,454) = 20.810^{**}$
学業					
世間	1.044 (.587) a	.334 (.701) b	-1.139 (.622) c	-.754 (.736) c	$F(3,227) = 93.899^{**}$
友達	.913 (.559) a	.206 (.719) b	-.069 (.714) b	-1.109 (1.010) c	$F(2,454) = 2.657$
身内	.941 (.806) a	.050 (.874) b	-.162 (.850) b	-.712 (.913) c	$F(6,454) = 11.899^{**}$
健康・身体					
友達	.441 (.826) a	.281 (.739) a	.240 (.861) a	-1.136 (.910) b	$F(3,227) = 93.267^{**}$
権威	1.235 (.829) a	.180 (.768) b	-.697 (.570) c	-.857 (.597) c	$F(2,454) = 3.477^*$
知識	.402 (.821) a	.474 (.758) a	-1.043 (.818) b	-.654 (.811) b	$F(6,454) = 19.248^{**}$
金銭・経済					
一次的	.809 (.628) a	.255 (.727) b	-.148 (.928) b	-1.086 (.904) c	$F(3,227) = 150.605^{**}$
公式的	1.411 (.785) a	.118 (.735) b	-.814 (.548) c	-.767 (.497) c	$F(2,454) = 3.522^*$
知識	.718 (.568) a	.420 (.766) a	-1.266 (.511) c	-.633 (.820) b	$F(6,454) = 14.858^{**}$
将来・人生観					
一次的	.765 (.641) a	.201 (.768) b	.032 (.825) b	-1.055 (.992) c	$F(3,227) = 93.303^{**}$
知識	.864 (.462) a	.253 (.684) b	-1.287 (.784) d	-.333 (1.061) c	$F(2,454) = 1.731$
公式的	1.318 (.810) a	.134 (.652) b	-.699 (.792) c	-.813 (.702) c	$F(6,454) = 18.862^{**}$

注1) 表中の異なるアルファベット間は、Schéffe 法による多重比較の結果 5% 水準で有意差のあることを示す。

注2) F 値は、上段がクラスタ要因の主効果、中段が準拠集団要因の主効果、下段は交互作用効果を示す。

注3) *: $p < .05$, **: $p < .01$

第3部その3

表4 女性クラスタ別、準拠志向度標準点の平均値と標準偏差及び分散分析結果

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5	F値
バックグラウンド						
世間	-.024(.687)b	.437(.824)a	-.140(.861)b	-.944(.785)c	.747(.852)a	F(4,270)=40.020**
友達	.064(.656)b	-.408(.966)b	-.058(1.060)b	-.326(1.106)b	.620(.798)a	F(3,810) = .140
親類縁者	.317(.734)a	-.555(.961)c	-.190(.816)b	-.277(1.006)c	.583(1.007)a	F(12,810) = 6.613**
養育者	.140(.754)b	-.581(1.001)c	.051(.852)b	-.282(1.027)c	.546(.977)a	
家庭生活						
知識	-.127(.594)b	.176(1.087)b	.241(.767)b	-.1.027(.699)c	.777(.760)a	F(4,270)=75.560**
権威	.538(.735)a	-.628(.687)c	-.138(.821)b	-.743(.590)c	.865(.943)a	F(3,810) = .127
友達	-.029(.951)b	-.668(1.041)c	.301(.952)a	-.326(1.003)c	.578(.784)a	F(12,810) = 9.218**
親類縁者	.277(.665)a	-.657(1.032)c	-.140(.876)b	-.286(.883)b	.659(.985)a	
友人関係						
知識	-.263(.616)c	.313(.982)b	.305(.718)b	-.1.080(.794)d	.785(.622)a	F(4,270)=61.301**
身内	.414(.760)a	-.835(.761)c	-.203(.829)b	-.341(.768)c	.784(.977)a	F(3,810) = .169
友達	-.130(.777)b	-.601(.998)b	.434(.747)a	-.231(1.234)b	.404(.771)a	F(12,810)=12.569**
課題	.369(.808)a	-.506(.994)b	-.196(.794)b	-.431(1.012)b	.661(.830)a	
恋人関係						
権威	.470(.687)a	-.554(.776)b	-.267(.574)b	-.633(.504)b	.872(1.214)a	F(4,270)=76.087**
知識	-.251(.727)c	.287(.906)b	.288(.781)b	-.974(.863)d	.705(.735)a	F(3,810) = .219
友達	.152(.767)a	-.700(1.040)b	.346(.641)a	-.464(1.107)b	.547(.791)a	F(12,810)=12.630**
情緒	-.144(.640)b	-.950(.968)c	.254(.995)a	.051(1.081)b	.554(.616)a	
食事						
知識	-.176(.693)c	.042(1.034)c	.376(.875)b	-.969(.693)d	.743(.715)a	F(4,270)=49.694**
権威	.417(.798)b	-.651(.598)d	-.142(.704)c	-.643(.754)d	.890(1.001)a	F(3,810) = .093
友達	-.015(.898)b	-.712(1.032)c	.324(.909)a	-.308(.958)c	.562(.720)a	F(12,810)=10.504**
家族	-.133(.952)a	-.534(1.450)b	.222(.751)a	.055(.890)a	.260(.755)a	
住まい						
権威	.381(.642)b	-.716(.570)d	-.143(.658)c	-.731(.676)d	1.056(.940)a	F(4,270)=71.823**
友達	-.138(.868)b	-.714(1.014)c	.433(.639)a	-.411(1.026)c	.673(.718)a	F(3,810) = .427
知識	-.306(.667)c	.559(.751)a	.319(.708)b	-.1.156(.756)d	.701(.680)a	F(12,810)=21.994**
血族	.289(.828)a	-.958(.901)c	-.001(.977)b	-.063(.921)b	.532(.774)a	
ファッション・財産						
権威	.296(.588)b	-.645(.521)c	-.145(.830)b	-.693(.472)c	1.038(1.096)a	F(4,270)=63.150**
友達	.076(.739)b	-.576(.984)c	.237(.699)b	-.569(1.127)c	.717(.704)a	F(3,810) = .430
知識	-.480(.673)b	.633(.515)a	.486(.624)a	-.1.134(.847)c	.626(.692)a	F(12,810)=22.151**
情緒	-.183(.737)a	-.766(1.290)b	.057(.966)a	.190(.938)a	.485(.624)a	
性格・能力						
権威	.534(.566)b	-.655(.591)d	-.191(.717)c	-.776(.735)d	.968(.914)a	F(4,270)=95.068**
知識	-.164(.560)b	.565(.665)a	.446(.588)a	-.1.347(.740)c	.655(.612)a	F(2,540) = .760
一次的	-.143(.651)b	-.908(1.004)c	.384(.669)a	-.195(1.142)b	.651(.694)a	F(8,540)=31.598**
余暇活動						
権威	.508(.686)b	-.641(.573)c	-.245(.673)c	-.745(.577)d	.996(.994)a	F(4,270)=68.383**
知識	-.211(.608)b	.590(.822)a	.349(.603)a	-.1.247(.713)c	.661(.679)a	F(3,810) = .457
友達	-.067(.839)b	-.899(.894)d	.437(.690)a	-.294(1.053)b	.631(.732)a	F(12,810)=23.737**
家族	.059(.674)a	-.792(1.204)b	.087(1.062)a	.079(.942)a	.385(.742)a	
学業						
知識	-.259(.459)b	.385(.903)a	.434(.672)a	-.1.237(.616)c	.770(.692)a	F(4,270)=52.419**
学校	-.007(.832)b	-.691(.979)c	.460(.607)a	-.417(1.156)b	.528(.753)b	F(3,810) = .197
公式的	.334(.592)b	-.664(.602)d	-.143(.789)c	-.730(.706)d	1.055(.888)a	F(12,810)=25.807**
我が家	-.232(.827)b	-.127(1.077)b	.172(1.030)b	.400(1.109)a	-.256(.789)b	
健康・身体						
権威	.433(.465)b	-.766(.500)d	-.113(.856)c	-.765(.508)d	1.057(.950)a	F(4,270)=84.715**
知識	-.276(.626)b	.443(.866)a	.464(.704)a	-.1.123(.827)c	.604(.688)a	F(2,540) = .472
一次的	.042(.692)c	-.781(1.050)d	.274(.817)b	-.326(1.066)d	.627(.738)a	F(8,540)=21.055**
金銭・経済						
権威	.279(.628)b	-.544(.840)c	-.140(.840)c	-.768(.521)c	1.047(.866)a	F(4,270)=67.680**
知識	-.200(.633)c	.289(1.056)b	.271(.880)b	-.1.061(.649)d	.761(.609)a	F(3,810) = .188
友達	.071(.867)a	-.770(.904)b	.326(.642)a	-.426(1.068)b	.647(.793)a	F(12,810)=13.798**
家族	-.203(.824)c	-.653(1.345)c	.259(.838)b	.073(1.054)b	.358(.579)a	
将来・人生観						
世間	-.109(.652)c	.369(.724)b	.337(.610)b	-.1.299(.718)d	.802(.604)a	F(4,270)=74.048**
友達	.178(.726)b	-.735(.952)c	.225(.740)b	-.585(.952)c	.774(.763)a	F(3,810) = .311
親類縁者	.240(.683)b	-.743(.663)c	-.258(.770)c	-.429(.868)c	.997(.896)a	F(12,810)=17.566**
情緒	-.239(.701)c	-.536(1.250)c	.204(.868)b	.065(1.161)b	.356(.717)a	

注1) 表中の異なるアルファベット間は、Schéffe法による多重比較の結果5%水準で有意差のあることを示す。

注2) F値は、上段がクラスタ要因の主効果、中段が準拠集団要因の主効果、下段は交互作用効果を示す。

注3) * : $p < .05$, ** : $p < .01$

表5 男女対象者別、準拠集団の拡張可能性類型

男性対象者 (N=231)	
「広範な準拠集団をもとうとするタイプ」	(N = 37, 16.017%)
.....	全ての対人関係を準拠集団としていこうとする。
「内・外集団を分極化させるタイプ」	(N = 111, 48.052%)
.....	外在の知識と一次集団とが準拠集団として併用される。
「友人関係にのみ埋没するタイプ」	(N = 34, 14.719%)
.....	身近な友人関係だけで、家族や地域、あるいは世間に目を向けようとしなない。
「全ての対人関係が希薄なタイプ」	(N = 49, 21.212%)
.....	相互依存的な対人関係をもとうとしなない。
女性対象者 (N=275)	
「権威受容タイプ」	(N = 52, 18.909%)
.....	権威集団や世間集団のみを準拠集団とする。
「知識偏重タイプ」	(N = 46, 16.727%)
.....	家族や友達、教職員や職場、地域社会等の直接相互作用がある人間関係に目を向けず、書物やメディアを重視する。
「世間に拡張していかないタイプ」	(N = 54, 19.636%)
.....	家族や友人などの一次集団のみを準拠集団とする。
「全ての対人関係が希薄なタイプ」	(N = 61, 22.182%)
.....	相互依存的な対人関係をもとうとしなない。
「広範な準拠集団をもとうとするタイプ」	(N = 62, 22.545%)
.....	全ての対人関係を準拠集団としていこうとする。

と命名する。第2クラスは、日頃直接顔を合わせる他者よりも、書物や映画、インターネットに描かれた人物像や法規慣習に自己を準拠させようとする志向が窺われたので、「知識偏重タイプ」とした。第3クラスは、男性と同様に、直接の相互作用が可能な他者のみに準拠しようとする特徴があるので、「世間に拡張していかないタイプ」とした。第4クラスは多様な他者集団に対して準拠志向が弱く、逆に第5クラスでは広い範囲で準拠志向の強いことが認められよう。そこで、第4クラスを「全ての対人関係が希薄なタイプ」、第5クラスを「広範に準拠集団をもとうとするタイプ」とする。

男女毎に、それぞれのクラスの占める割合を表5に示す。表5から明らかな通りに、男性においては「内・外集団を分極化させるタイプ」を筆頭に「友人関係にのみ埋没するタイプ」のように、女性においても「世間に拡張していかないタイプ」「権威受容タイプ」「知識偏重タイプ」といった、狭いネットワークしか持ち得ない者が見出された。また男女共に「全ての対人関係が希薄なタイプ」も2割を超えていた。しかしその一方で、やはり男女共、「広範に準拠集団をもと

うとするタイプ」も2割前後見受けられた。

現在の準拠集団 クラスタ間で現在の準拠集団が異なっているかを検討するため、各クラスタにおける準拠集団の選択頻度を調べた。その結果、全クラスタ共、現在の準拠集団として家族が最多であり、次いでクラスやクラブを選択する者が多くなっていた。

考察

準拠集団としての道具的機能性評価

本研究では、現代青年が、自己の諸側面において準拠枠としてどのように多様な対人関係・集団を捉えているかを探索することが目的の1つであった。そこで自己の諸側面毎に、集団の道具的機能評価に基づいて多様な対人関係を因子分析により分類した結果、女性の方が男性よりも因子数が多く、対人関係について準拠集団としての道具的機能をより細分化して捉えている傾向が窺われた。こうした性差の原因は、今後の検討課題とされる。

第二には、男女共に自己の諸側面の間で、因子を構成する他者集団群が必ずしも同じではなかったことがあげられる。例えば、クラス・クラブ・恋人・職場や、書物・メディア・過去経験、あるいはまた親戚・近隣者は、男女共にいずれの自己の側面においてもほぼ同一の因子を構成していた。これらの他者集団群は、確かにどのような自己の側面においても類似した道具的機能を有するものとして捉えられていると考えられよう。しかしその一方で、家族は、自己の側面間で異なる因子を構成するものであることがわかる。因子分析の結果を踏まえるならば、家族は、男性にとって、‘家庭生活’の面で身内としての意味合いが強く、‘バックグラウンド’、‘食事’、‘金銭’、‘将来’に関してはクラスやクラブと同様にいわば寄り添う存在として、しかし‘恋愛’に関しては法規慣習と同じ因子を構成し、いわば法の番人のような存在として見なされていると解釈することもできるのではなからうか。女性においても、表2から明らかな通りに、‘食事’、‘余暇’、‘金銭’の面で、家族は、他の他者集団と代替の難しい独自の道具的機能が認められていると考えられるのに対して、‘バックグラウンド’では教職員と、‘家庭生活’や‘友人関係’については親戚や近隣者と、あるいは‘性格’や‘健康’の面ではクラス・クラブ・恋人と、それぞれ同一の因子を構成していた。さらに教職員も、クラブ・クラスと同一因子をなす場合と、親戚・近隣者・法規慣習などとまとまる場合とに分けられ、また法規慣習についても、書物・メディア・過去経験と同じにまとまる場合と、親戚・近隣者・教職員と同因子を構成する場合

のあることが認められた。

この結果は、ある特定な対人関係がどのような自己の側面においても常に同様の準拠集団として機能するとはみられていないことを示している。自己の指針を得たい問題によって、個々の対人関係が有すると判断される道具的機能が異なり、その判断に基づき多様な対人関係が捉え直されていく過程を想定することができる。異質性を前提とする道具的機能についても、対人関係の動態を検討する際には考慮を要しよう。

対人ネットワークの拡張可能性

本研究では、青年が自己の準拠枠として今後どれ程に広くネットワークを張り巡らせようとする意向しているか、検討することが第2の目的であった。

分析の結果、「友人関係にのみ埋没するタイプ」や「世間に拡張していかないタイプ」「知識偏重タイプ」といった、狭いネットワークしか持とうとしない者が多く、また「全ての対人関係が希薄なタイプ」も見出された。これらは、現代青年の対人関係が希薄化し、またネットワークが狭いと、先行研究における指摘と一貫した結果と見なせよう。しかしその一方で、やはり男女共に、「広範に準拠集団をもとうとするタイプ」も少なくない頻度で見受けられた。このことから、必ずしも全ての青年にわたり希薄化や狭さを特徴として一般化することに対してはより慎重でなければならないように思われる。

本研究では、現在の準拠集団についても調べていた。結果は、総じていずれのクラスタにおいても、家族やクラスといった身近な対人関係を、現在の準拠集団としていることを示していた。しかし一方では、それ以外の対人関係に対しても準拠集団として志向する者が確かに見出された。従って、現状では、身近な対人関係が準拠集団として機能してはいるものの、今後新たに自己の指針を得る必要性が生じれば、その身近な対人関係にとどまらずにそれ以外の他者との間でネットワークを構築していこうとする可能性を想定されよう。このように、現代青年についても相互依存的なネットワークを広げられる可能性を認めた上で、しかしその志向性が弱い現状にあってはそうなる必然性を探索していくことが、今後対人関係のあり方とその現代的特質を理解していく際にはより重要となるのではなからうか。加えてまた現代青年の内的属性の表れとする捉え方と共に、例えば Berscheid & Campbell (1982) や Dizard & Gadlin (1990) が指摘するように、より巨視的 (macro perspective) な観点からも、対人関係のあり方における現代的特質を理解していく必要があるように思われる。

引用文献

- Berscheid, E. & Campbell, B. (1981). The changing longevity of heterosexual close relationships. In M. J. Lerner. & S. C. Lerner (Eds.). *Justice motive in social behavior*. New York: Plenum. Pp. 209-234.
- Burnes, R. (1979). *The self-concept*. London: Longman.
- Dizard, J. & Gadlin, H. (1990). *The minimal family*. Amherst: University of Massachusetts Press.
- 榎本博明 (1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.
- 蜂屋良彦 (2000). ソーシャル・サポートと適応 神戸大学文学部「五十周年記念論集」, 125-144.
- Jourard, S. M. & Lasakow, P. (1958). Some factors in self-disclosure. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 91-98.
- 門脇厚司 (1995). 社会化異変の諸相 門脇厚司・宮台真司 (編) 「異界」を生きる少年少女 東洋館出版社, Pp. 3-23.
- Kelley, H. H. (1952). Two functions of reference groups. In G. E. Swanson, et al. (Eds.), *Readings in social psychology*. Revised edition. Henry Holt, Pp. 410-414.
- 久世敏雄 (1975). 青年期の自己開放性に関する一検討: 対象の類型の観点から 名古屋大学教育学部紀要, 22, 1-12.
- 中村陽吉 (1952). 集団成層構造の研究 心理学研究, 23 (1), 1-11.
- 岡林春雄 (1997). 現代社会と人間: 認知的社会臨床心理学 北樹出版
- 岡田努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10 (2), 69-84.
- Parsons, T. & Bales, R. F. (1955). *Family, socialization and interaction process*. Free Press.
- 千石保 (1991). 平成日本の若者たち「まじめ」の崩壊 サイマル出版会.
- Sherif, M. & Sherif, C. W. (1964). *Reference groups*. New York: Harper & Row.
- 下斗米淳 (1997). 自己・他者認知間の認知次元の共通性現象の生起因 専修人文論集, 61, 75-97.
- 下斗米淳 (2002a). 青年の対人ネットワークは狭いか?—準拠集団の道具性と拡張可能性からの検討 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, S57.
- 下斗米淳 (2002b). 現代青年の, 家族・友だち・学校・メディア・世間への向き合い方と結びつき方 日本発達心理学会北陸地区シンポジウム講演記録集, 1-9.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.